

第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

言の葉の薬

兵庫県

川西市立清和台中学校

二年 皿海 百花

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ある時、友人が私に「これ見て」と言って右腕を見せてきた。その先にあつたのは複数の痛々しい切り傷だった。自ら切った傷だった。私は目の前にある光景に思わず目を瞑りたくなってしまった。勿論友人の腕に自ら作った傷なんか本当はあつて欲しくないし、して欲しくもない。でもそのことを本人に伝えてしまったら「分かってくれないんだ」という気持ちになるかもしれない。そう思いとにかく彼女の話を聞き自分の本当の思いは言えずにいた。そうして家に帰るなり私は母にそのことを話した。言わないでおくこともできたけれど彼女の命に関わる問題だから私一人の判断で命が消え入ることだつてありうるからだ。すると母は、私が彼女にどうして欲しいのか聞いた。なので私は「リスカなんてして欲しくもないし、ただでさえ心が傷を負っているっていうのに物理的にも自分を傷つけて追い込んで何になんのかなっていうのが私の思い」と答えた。その思いに対して母は「そのままその子に言ったらいいんじゃない？ ベストアンサーなんて誰にも分からないし」と言った。私はその言葉にハツとした。自分は今まで彼女が求めている言葉をいつの間にか探していたことに気がついた。母が言ったようにそんなこと本人ですらも何を求めているのか彷徨っているからこそ、私に打ち明けたのかもしれない。この状況から救つてほしいという SOS なのかもしれない。

翌日私は彼女に正直な思いを打ち明けた。「友達としては、リスカはして欲しくない。気持ちからは分からないわけじゃないけど、リスカをして何になるのかな」そう言った。彼女にとつては厳しい一言だったかもしれない。私も上手く伝えられたのか分からない。だから怖かった。私の言葉は命を担った言葉になるかもしれない。その時どう思ったのか彼女はあまりその言葉に対して強くは反応しなかった。しかし、翌日彼女の口からは予想だにしない言葉が飛び出てきた。「昨日さリスカしたことをお母さんに話したよ。話したらお母さんはもうリスカはしないでくれて泣いてたけど——」そう言った。彼女の目は前より明るく希望に向かつているように見えた。それは、これまで、たつた独りで背負っていた傷を誰かに打ち明けることにより少し自分を解放することができたからなのかもしれない。

後に母が言っていたのだが、私が相手のことを想つて悩んでいたもので、どんなに拙い言葉でも相手にはちゃんとその想いは伝わると思ったから、「そのままその子に言ったらいいんじゃない？」と言つたそうだ。

言葉は、言う相手や、その人との関係性、使う言葉によつて良くも悪くもなる。まるで毒ともなり得る薬のように。だから言葉は、薬と同じように慎重に扱わなければならない。一つ一つの言葉で死まで追い込む毒になると同時に、人を救える薬にもなるならば、私は言葉で人を救えるような心を持った人間になりたい。

近頃、その想いとは裏腹に誹謗中傷で、心が傷ついた人たちが増えている。だからこそ今、私は多くの人を救えるような言葉を探し、様々な形でメッセージを送り続けたい。